日本ロレンス協会第 54 回大会プログラム

◎日　時：　2023 年 6 月 17 日（土）
◎会　場：　高知県立大学永国寺キャンパス　教育研究棟 A110 教室
　住　所：　〒780-8515　高知市永国寺町 2 番 22 号
　連絡先：　高知県立大学文化学部　鳥飼真人
　　Tel: 090－8820－3505
　　e-mail: wegmarken@hotmail.co.jp / torikai_masato@cc.u-kochi.ac.jp

◎交通アクセス：
【高知龍馬空港から】
・車・タクシーをご利用の場合／約 40 分
・バスをご利用の場合／永国寺キャンパスまで約 50 分
　空港連絡バス（外部サイト：とさでん交通・高知駅前観光）を利用して「はりまや橋観光バスターミナル」または「JR 高知駅」までお越しください。
【JR 高知駅から】
・車・タクシーをご利用の場合／約 5 分
・徒歩の場合／約 15 分

◎昼食のご案内：帯屋町周辺の商店街（高知県立大学から南へ徒歩 10 分）に、多くの食事処があります。

◎宿泊のご案内：　プログラム最後に宿泊施設をリストにして掲載しました。

【役員会】

日　時：　6 月 17 日（土）10：30～12：30
場　所：　高知県立大学永国寺キャンパス　教育研究棟 A106 教室
※　昼食を用意します。代金は当日お支払い下さい。

【大会】 6 月 17 日（土）　13：00～

受　　付：　12：30～

総合司会：　鳥飼　真人（高知県立大学准教授）

◎　開会の辞：　会長　石原　浩澄（立命館大学教授）（13：00～）

◎　開催校挨拶：　三浦　要一（高知県立大学文化学部長）（13：05～）

研究発表　（13：10～14：20）

司会　新井　英永（熊本大学教授）

Posthuman Bildungsroman としての *Sons and Lovers*――芸術家と星の影響をめぐって

古城　輝樹（東京大学大学院生）

司会　中林　正身（相模女子大学教授）

ヘレン・ダンモアの『暗黒のゼナー』を「バイオフィクション」として読む

星　久美子（愛知学院大学教授）

＊休憩　14：20～14：30

シンポジウム　（14：30～17：00）

1900-30 年代のモダニズム雑誌と越境者たち

司会　福西　由実子（中央大学教授）

The New Age を再考する
――植民地出身のジャーナリスト Beatrice Hastings を中心に
講師　加藤　彩雪（大妻女子大学専任講師）

分散するテクスト、切断される詩人の身体
――Emmy Veronica Sanders と 1920 年代の expatriate little magazines
講師　大山　美代（近畿大学特任講師）

越境するユダヤ人ジャーナリストたち
――1920-30 年代における Stefan Lorant、Laszlo Moholy-Nagy の活動を例に
講師　福西　由実子（中央大学教授）

＊休憩　17：00～17：05

◎　**総会**　（17：05～17：35）

◎　**閉会の辞：**　副会長　木下　誠　（成城大学教授）

◎　**交流会**　（17：35～18：30）

研究発表

Posthuman Bildungsroman としての *Sons and Lovers*——芸術家と星の影響をめぐって

古城　輝樹

Mikhail Bakhtin は伝統的な Bildungsroman を論じる上で主人公の人間的成長と環境の変化が同期する「歴史的時間性」を重視したが、そこに伏流する人間中心主義は現代の Bildungsroman 成立を困難にしている。しかし彼が「牧歌（idyll）」的要素として位置づけた自然の円環的時間性は、逆説的ながら人間中心主義を無化・解体する Posthuman 的 Bildungsroman の可能性を示唆している。本発表ではこの観点から *Sons and Lovers* における「星」の象徴性に注目する。芸術家 Paul の「成長」は女性関係を通じて反復される「星の影響」のもとにある一方、彼の芸術家性は女性たちからの「影響」の差異を脱構築することでみずからの視線による「星への影響」を生じさせ、影響関係を転倒させている。そして一見すると特権的立場を得ているようにも見える Paul の芸術家としての視点が星の描く弧の軌道を通じて円環的時間と結ばれることで、彼の「成長」もまた円環するものに取り込まれることが示唆される。制度的宗教に対する疑問・葛藤の見られるこの小説において円環的時間がキリスト教の直線的時間と対置されることもまた重要と思われる。以上の観点から、本発表では Paul の芸術家としての「成長」の意味を捉え直し、Posthuman Bildungsroman としてこの小説を読むことを試みたい。

ヘレン・ダンモアの『暗黒のゼナー』を「バイオフィクション」として読む

星　久美子

小説に歴史上の人物が登場する「バイオフクション」(biofiction)は，1990 年代以降、数多くの作品が出版され，近年では新たなジャンルとして確立されつつある．マイケル・ラッキー(Michael Lackey)は，2017 年に「バイオフィクション」に関する二冊の論文集——*Biographical Fiction: A Reader* および *Biofictional Histories, Mutations, and Forms*——を編纂・出版している．前者の「序論」で，ラッキーは次のように宣言する——「この論文集はバイオフィクションの正式な到来を象徴するものであり，バイオフィクションはついに歴史小説やライフ・ライティングから独立し，独自の語りの空間を確立したのである」．ラッキーは，バイオフィクションの本質的な特徴のひとつとして，バイオフィクションはバイオグラフィーとは異なるという点を強調する．当たり前のように聞こえるかもしれないが，バイオフィクションの伝記対象が著名である場合，読者はそれをバイオグラフィーと混同し、少しでも事実と異なるところがあると批判する傾向があるとラッキーは言う．したがって，バイオグラフィーが伝記対象の人生に関する事実をできる限り正確に提示することを目的とするのに対して，バイオフィクションは著者が伝記対象の人生を利用して自身の世界観を創造することを目的としているという違いを念頭に置いておく必要があるのだ．

本発表は，1993 年に出版された D・H・ロレンスを伝記対象とするヘレン・ダンモア(Helen Dunmore)の『暗黒のゼナー』(*Zennor in Darkness*)をバイオフィクションとして考察し，この作品においてロレンスの伝記的事実がどのように利用されており，それによってダンモアがどのような世界観を示そうとしているかを明らかにする．この考察を通して，「バイオフィクション」をどう読むべきかという問題を考えてみたい．

シンポジウム

1900-30 年代のモダニズム雑誌と越境者たち

司会　福西 由実子

本シンポジウムの発端は、今回の大会に向けてシンポジウムに関するアイデアを会員に募った際、本シンポ講師の大山氏から「ロレンスその他と 20 世紀初頭の雑誌メディアに関して」という提案があったことである。協会執行部は、これが広い関心を喚起する、また複数年かけても追求できそうな題材であると捉え、「雑誌メディアとロレンス」についての導入的シンポジウムとして討論の場を設定したいと（ロレンス専門外である）筆者に打診された。講師 3 名でこのテーマについて慎重に議論した結果、1900-30 年代にイギリス国内外で発行された文芸批評・芸術論にかかわる雑誌を扱うこと、これらの雑誌とロレンスやその他有名無名の作家・投稿者たちとの関わりについて論じる方向性が決まったが、議論を重ねるにつれ、各々の中心的関心がロレンス「その他」の方にあることがわかってきた。

そこで、「雑誌メディアとロレンス」企画第一弾である今回は、〈ロレンスの不在〉から始まることとなった。ロレンス協会という個別作家学会のシンポジウムであるのに、ロレンスが正面から論じられることはない。いささか奇異に映るかもしれないが、ロレンスと同時代の、そして彼の死後すぐのモダニズム雑誌をめぐる状況に対する見識を深めることは、相補的にロレンスのテクストの読みの可能性を広げることにつながりはしないだろうか？ 1900-1910 年代に南アフリカ出身の女性ジャーナリスト Beatrice Hastings と *The New Age* との関係は、イギリス国外からの観察者の目をもつロンドンのアウトサイダーであったという点でロレンスと重なるだろうし、1920 年代にオランダ詩人 Emmy Veronica Sanders がアメリカに渡り、身体や生命主義をテーマとした詩や芸術論を展開していたことは、ロレンスの創作と通じる部分がある。1920-1930 年代にハンガリー出身の Stefan Lorant と Laszlo Moholy-Nagy が視覚メディアを中心にイギリスに残した仕事は、ロレンスが生きた時代、そして戦後にいたる国民文化表象における外国人の視座についての問題を喚起するだろう。ロレンスと同じくモダニズムの主流から外れた表現者たち（しかし階級上昇や植民地・ヨーロッパ大陸からの移動などのモビリティを目指す者たち）は、モダニズム雑誌とどのように関わり、何を生み出していったのか。彼ら「越境者」の眼差しに焦点を当て、考えてみたい。

The New Age を再考する
——植民地出身のジャーナリスト Beatrice Hastings を中心に

加藤　彩雪

Beatrice Hastings は、A. R. Orage が編集長を務めたモダニズム文芸誌である *The New Age* の編集に 1907 年から 1914 年まで携わった南アフリカ育ちのジャーナリスト兼「新しい女」(New Woman) である。ロンドンにおいてアウトサイダーであった点や、母国を離れ海外の複数の場所を拠点として文筆活動を行った点においては、ロレンスと似た境遇を生きた人物であると言える。

Hastings は 1990 年代中頃まで、その存在がほとんど不明の作家であり、今日でも *The New Age* といえば Orage の貢献ばかりが注目されている。しかし、戦前に出版された初期の *The New Age* を一読してみると、その誌面の 3 割以上が Hastings によって書かれたものであった

ことが分かる。*The New Age* のために書き下ろした数多くの短編、詩、そしてエッセイがそこには掲載されていたのである。また、執筆内容も、南アフリカの独立からイギリスの女権拡大運動まで多岐に渡っていた。

本発表では、Hastings が *The New Age* に本名ではなくペンネームを使って執筆していたことに注目をする。特定のペンネームではなく、Beatrice Tina、Cynicus、Robert a Field、T.K.L.、D. Triformis など、自分のものではないあらゆる名前を使って雑誌に登場していたことは、ロンドンのモダニズム文芸誌における彼女の活躍や境遇を考察する上で見逃せない要素の一つであるからである。ペンで生きることを志して南アフリカからやって来た女性ジャーナリストの、ロンドンのプリントカルチャーにおける「主体」のあり方について、筆名の多様性という観点から考えていきたい。

分散するテクスト、切断される詩人の身体
——Emmy Veronica Sandersと1920年代のexpatriate little magazines

大山　美代

Emmy Veronica Sanders (1882-1950)は、1920 年代前期にアメリカ発のモダニズム文芸誌で短期間活動した、オランダ人詩人である。*Poetry* や *The Double Dealer* を中心に掲載された Sanders の詩作は、自然界や身体の「動き」を賛美する、ロレンスに似た生命主義思想に基づいている。しかし、英語圏での作家活動の短命さゆえにか、彼女の作品はほとんど評価されていない。

一方で Sanders は、*The Little Review* や *Broom* に寄稿した評論の中で、当時の雑誌メディアのあり方に対する提言を度々行っている。自らの創作物も雑誌掲載という形をとっているにもかかわらず、アメリカの小雑誌の商業性や海外戦略を痛烈に批判し、モダンアートの大衆性を否定する。また Sanders は、芸術作品を断片的にしか掲載できないという定期刊行物の性質によって、「詩人の身体が切断される (“disjecta membra poetae”)」と、ホラティウスを引用して表現する。その言葉は、複数の雑誌という分散するテクストをかき集めることでやっと浮かび上がる Sanders の断片的な肖像を、的確に表している。

本発表ではまず、Sanders の詩人としての創作活動を紹介し、ロレンスとの共通点を取り上げる。そして、雑誌の中という限られた言論空間で、「芸術と詩人の権利」を叫んでいた Sanders の声に着目し、1920 年代の文芸誌の商業的性質との確執について考えたい。

越境するユダヤ人ジャーナリストたち
——1920-30 年代における Stefan Lorant と Laszlo Moholy-Nagy の活動を例に

福西 由実子

本報告では、1930 年代のナチスのユダヤ人に対する弾圧とともにヨーロッパ大陸からイギリスへ移動を余儀なくされたジャーナリスト、デザイナーたちが、イギリス国内でどのような支援（また敵性外国人としての差別）を受けながら創作活動を継続しえたのか、そしてイギリスのモダニズム雑誌文化の発展にどのような影響を与えたのか、Stefan Lorant と Laszlo Moholy-Nagy の活動を例に考察してみたい。

Stefan Lorant は 1920 年代にハンガリーとドイツで映画監督、雑誌編集者として活動したのち、1930 年代にイギリスで革新的なフォト雑誌 *Picture Post*、*Lilliput* を立ち上げたジャーナリ

ストである。彼はドイツ時代のネットワークを駆使し、同じく越境した写真家やデザイナーたちと協働しながら、「英国的かつ愛国主義的な」イメージを構築していく。

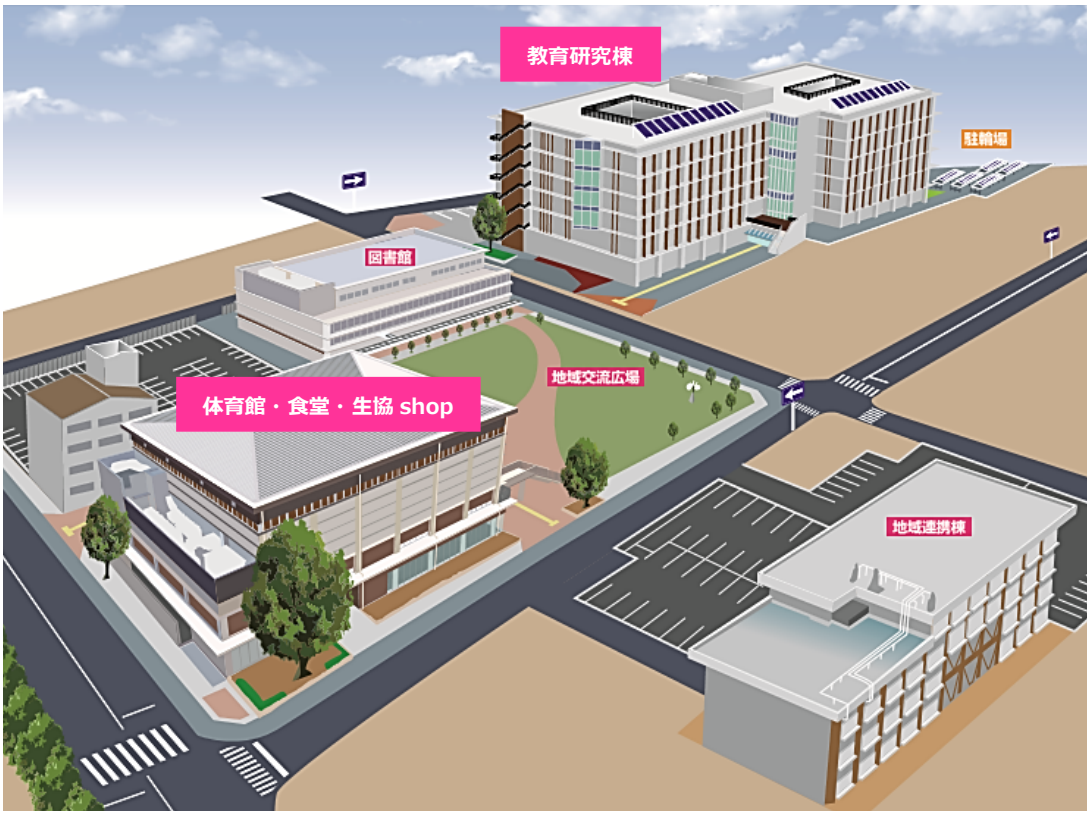
彼が協力を仰いだ一人が Laszlo Moholy-Nagy である。Lorant と同じくハンガリー系ユダ人であった彼は、1920 年代にバウハウスで教鞭を振るったのち、1930 年代に校長 Walter Gropius らとともにロンドンに亡命、ハムステッドのアイソコン・フラットに居住し他の越境者たちとコミュニティを形成しつつ、写真家、グラフィックデザイナーとして活動した。

1940 年代にはこうした大陸モダニズムの越境者の多くがアメリカへ渡ったわけであるが、彼らがイギリスに残らなかった（残れなかった）理由にも触れつつ、彼らが第二次世界大戦前後のイギリスの representation を担っていたこと、またこの流れが戦後にも繋がっていったことを論じたい。

高知県立大学永国寺キャンパスまでのアクセス

JR 高知駅から車で 5 分／徒歩 15 分

永国寺キャンパス　キャンパスマップ



※ A110 教室、A106 教室は、教育研究棟の 1 階です。

大会会場周辺ホテル情報

高知県立大学から徒歩 10～15 分ほどのエリア（大川筋、廿代町、大手筋、帯屋町、JR 高知駅周辺）にある宿泊施設を下記に提案致します。はりまや町（とさでん交通桟橋線の東側）にも宿泊施設は相当数ありますが、徒歩で大学まで 20 分ほどかかります。

【高知県立大学周辺のホテル】

・リッチモンドホテル高知
　住所：高知県高知市帯屋町 1-9-4　TEL：088-820-1122

・ドーミーイン高知
　住所：高知県高知市帯屋町 1-9-12　TEL：088-872-5489

・ブライトパークホテル
　住所：高知県高知市追手筋 1-5-13　TEL：088-823-4351

・ウェルカムホテル高知
　住所：高知県高知市追手筋 1-8-25　TEL：088-823-3555

・ホテル No. 1 高知
　住所：高知県高知市廿代町 16-8　TEL：088-873-3333

・高知パレスホテル
　住所：高知県高知市廿代町 1-18　TEL：088-825-0100

・高知アネックスホテル
　住所：高知県高知市廿代町 5-16　TEL：088-821-2111

・ツーリストイン高知
　住所：高知県高知市大川筋 1-5-5　TEL：088-820-5151

・プチホテル高知
　住所：高知県高知市北本町 1-8-13　TEL:088-826-8156

・西鉄イン高知はりまや橋
　住所：高知県高知市はりまや町 1-1-3　TEL：088-875-5454

【高知駅周辺のホテル】

・高知ホテル
　住所：高知県高知市駅前町 4-10　TEL：088-822-8008

・JR クレメントイン高知
　住所：高知県高知市北本町 1-10-59　TEL：088-855-3111

・高知パシフィックホテル
　住所：高知県高知市駅前町 1-15　TEL：088-884-0777